
幻葬のファントム

夢追人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻葬のファントム

【Nコード】

N5251P

【作者名】

夢迫人

【あらすじ】

『と禁』の二次創作ですが、時系列的には原作よりかなり前になるはずです。

作者の友人が『（記憶喪失になる前の）当麻って、なんで幻想殺しのこと知ってるの？誰かが教えたのかな？』という素朴な（？）疑問を持ったことがことの始まりでした…

〵〵原作開始より以前、いずれは物語の主人公となる上条当麻の従兄として、『上条優麻』は確かにそこに存在した。『幻想殺し』

を巡る失われた物語が、今、語られる。くく

最初の幻想

「久しぶりの日本だな」

僕　上条優麻は空港を出ると、照りつける初夏の日差しに目を細める。本格的な夏の到来はまだもう少し先だが、ここ数年の間暮らしていた英国ロンドンに比べるとかなり暑い。

「やっぱり半袖で来るべきだったかな…」

母国の気候を忘れた訳ではなかったが、それでもかつちりとしたスーツを着込んで来てしまった自分が恨めしい。背広を脱ぐと幾分かマシになったが、早くも汗ばんできたシャツが特有の居心地の悪さを伝えてくる。

早く着替えたい…

僕は唯一の荷物であるスーツケースを引きずりながら、足早に待ち合わせ場所へと急いだ。

「やあ、優麻くん。久しぶり」

指定されていた駐車場まで来ると、むこうから声をかけてきた。ポロシャツに綿パンの、無精ヒゲが目立つ、だがどこにでもいそうな感じのおっさんだ。

「刀夜叔父さんも、相変わらず元気そうですね」

「そう見えるかい？それでも一昨日にアメリカから戻ってきたばかりなんだよ。いやあ最近出張出張で大変だったけど、まだまだ現役で頑張れそうだね」

そう言つて朗らかに笑う彼は上条刀夜。僕の叔父にあたる人物だ。とある外資系企業で働いており、見かけによらずなかなかの出世頭だ。

「それじゃ、行こうか。その格好じゃ居心地悪いだろ」

「すみません。厄介になります」

「いいんだよ。うちの連中も久しぶりに君に会うの、楽しみにしてるんだから」

そう言つと叔父さんは停めてあつた彼の愛車　いかにも行楽用に購入しましたとでも言いたげなRVワゴン　に乗り込み、僕も後部座席に収まる。

アイドリング状態だったワゴンの中は、車内エアコンが効いていてひんやりと気持ちよかった。

「ふう」

風呂から上がると僕はまっすぐあてがわれた客間に戻つた。叔父さんが言つた通り、上条家は快く僕を迎えてくれた。僕もそれは嬉しかった。けれど、必要以上に彼らの好意に甘える訳にはいかない。辛い思いをするだけだ。

部屋に入るとまず窓を開けて室内の空気を入れ替える。カーテン

は閉めず、電気も点けない。

昼間晴れていたため夜になっても雲はなく、月の光が部屋の中を青白く照らす。神秘的なこの光が、僕は好きだった。

窓際に配置されたベットのの上に座り、量の膝を抱え、魅入られたように夜空を見上げる。

満天、とまでいかないが、それでも確かな輝きを放つ星たちが鮮やかに夜天を彩っていた。黒く、それでいてどこまでも透明な空に、突き刺すような銀の冷たさが光る。

僕は訳もなく、手を伸ばしてみたい衝動に駆られた。いや、気付いていないだけで身体は動いていたのかもしれない。

あの星たちはもう、滅んでしまったのだろうか。

それとも僕と同じ、今も滅びに向かって輝き続けているのだろうか

人というものは失ってしまう段階まできて、初めて失うものの尊さに気付くのだという。

怜悯な星光の中に僕ははつきりと感じた。

命の輝き。燃え上がる、その滅びの煌めきを。

光年という途方もない時間を越え

僕は束の間、過去の光に想いを馳せた。

「それじゃ、行つてきます」

「ああ。行つてらっしゃい」

時間があるうちに行きたいところがある。と言って、僕は上条家を後にする。

そして一步を踏み出そうとしたとき、僕はふと視線を感じて振り返った。

小学校二年生くらいの、男の子だった。夏らしさを感じさせる半袖短パン。活動的で少し利発そうな、子供特有の瞳がこちらをじっと見つめている。僕はそんな彼の表情に、引き締めていた頬をふつと緩める。

上条当麻。上条刀夜の息子、すなわち僕の従兄弟に当たる人物だ。

「当麻くん。どうしたの？」

「前にさ、また今度戻ってきたら一緒に遊んでくれるって、約束したよな」

こちらが見つめ返すと、当麻はどこか落ち着かなそうにそう答えた。

そう言えばあの時の当麻くんはまだ幼稚園だったっけ

僕はぼんやりとそこを思い出す。

「小学校に入って、友達もたくさんできたんだ。サッカーだって、俺、結構上手いんだぜ。だからさ、優麻も、一緒に来いよ。皆に、紹介するから」

僕はサッカー、苦手なんだけど

当麻の年齢相応の提案に、僕は内心で苦笑する。

「ごめんね。僕、これからちょっと出かけなきゃないんだ」

「仕事？」

「うん。そう…」

「ふうん…」

少なくとも嘘は言っていない。だが子供のカンというやつか、当麻には何か感じるものがあつたらしい。簡単に引き下がろうとはしなかった。

僕は当麻と目線の高さが同じになるよう屈むと、右手をぽんと彼の頭の上に置く。

「ごめんな。じゃ、こうしよう。確か今度、花火大会があるだろう？それに皆で行こうよ。叔父さんや友達も誘って、皆でさ。もちろん、僕も行くから。それじゃ、だめかな？」

「…分かった」

当麻はうなずいたが、まだどこか納得がいかない様子。僕はそんな当麻の頭をグリグリとなでると立ち上がる。

「じゃ、約束だ」

当麻を残し、僕は歩きだす。もう、振り返らない。自分でも、何故あんな約束をしてしまったのか分からない。とっさだったから？悲しませたくなかったから？

僕はまだ、どこかで希望を持ちたいんだ

馬鹿だと分かっているても、無駄だと分かっているても。

ごめんよ

歩く。歩き続ける。

全てが始まった、あの場所へ。

あの火災が嘘であつたかのように、そこはきれいに整えられていた。周りを囲むように木が植え込まれ、その内側には休憩用のベンチが並ぶ。中心に建っているのは、周囲の景色と比べるとどこか場違いな、艶やかな黒曜石のモニュメント。火災で還らぬ人となつた者たちの名が刻まれた、慰霊碑。

どんなに上辺を整えても、そこに残された傷跡は消えることはない。

永遠に。

僕は慰霊碑に歩み寄ると、ひんやりと冷たいその表面に指を這わせる。

沙耶

三谷沙耶。誰よりも愛し、誰よりも護りたいと願つた女性。
だが、護ることのできなかつた女性。

僕は目を瞑る。もういない女の幻にすがつても仕方がないことぐらい分かっている。よく、分かっている。
それでも

僕に、あと少しの勇気を

そのときだった。

それまではまばらだが感じられた、人の気配がいつの間になくなっていく。最初から僕以外の人間が居なかったような錯覚さえ受ける。

いや、錯覚ではない。本当に僕以外の人間がその場から消えていた。

キン、と不気味なほど澄み渡った、無音の世界。術者と対象者を空間ごと世界から隔離する、閉鎖結界特有の空気が僕の全身を緊張で包む。

乾いた靴音が、僕の背後から聞こえてきた。

「貴方なら、ここに来ると思っていました」

振り返った僕の視界に飛び込んできたのは、見知った一人の女性の姿だった。女性としてはその平均より身長が高く、短く切った黒髪に黒いスーツ。頭の前からつま先まで真っ黒、男装の麗人、という形容が彼女ほどしっくりくる人はいないだろうと僕は思う。

「由姫」

「いくら貴方がセンサーにかからないとはいえ、沙耶先輩と因縁のあるこの場所なら…探しましたよ、優麻先輩」

狩野由姫。僕が『つい最近まで』在籍していた、とある魔術結社の後輩だ。歳は確か僕より二つ下。彼女と組んだ期間はそれほど長くはなかったが、頭の回転が速く才能にも恵まれていて、次世代の魔術師を担うような存在だったと記憶している。

「今ならまだ間に合います。私と一緒に帰りましょう。先輩」

バツサリと切られた彼女の前髪が、揺れる。

「戻ってどうするんだい？『この能力』がある限り、封印指定されて永久にモルモット扱いがいいところさ」

うつすらと微笑み、僕はそう返した。僕が手に入れた能力は、一般に異常とされる魔術よりもさらに『異常』だ。神秘や奇跡の領域まで足がかかっているかもしれない。

そんなものがあの狂った研究者どもに見つかったらどうなるか。速攻で瓶詰めになされてホルマリン漬け確定だろう。

現に僕は異端者として、実際は「研究対象」として追われる身になったのだ。

「それに、僕にはまだやり残したことがある」

「私では、沙耶先輩の代わりにはなれませんか？」

凜々しくも、どこか少女特有の幼さを残したその顔を、由姫はそつとうつむかせた。

「月並みなようで悪いけど、君は君だ。沙耶じゃない」

無駄な問答をしている時間さえ惜しい。何を言われても、僕は歩む道を変える気はない。

目立たないように、両足を肩幅に開き、体重を均等にかける。

「変わりませんね…『優麻』」

一瞬。ほんの一瞬だけ彼女は微笑みを浮かべ、すぐにそれは冷徹な戦士のモノへと変化した。彼女もどこかで、僕がそう答えるであ

ろうと感じていたのだろう。隙なくこちらを窺う目線には、敬愛も、親愛も、秘めた想いさえも、一切現れることはなかった。

由姫が小さく右脚を下げる。

しばらくは互いに無言。目線、視線、殺気。それら全てを駆使して駆け引きを行う。

凍りついたような、長い長い一時の後

「行きます」

ついに、彼女が動いた。

最初の幻想（後書き）

初めまして。夢追人です。普段はリリなのの二次創作を作っているのですが、そっちが長らくほったらかしで、復帰のリハビリも兼ねてこのお話を作っている状態です。

あらずじにも書いてますが、そもその出発点は友人の一言です。それを私が自己解釈で妄想爆発させた訳で…しかも作者は最近の原作を知らない…イギリス行った辺りが記憶の限界です。

話数的にもそんなに長く続けるつもりはありません。長くてあと二話くらいを予定しています。

流転する幻想

由姫は右腕を跳ね上げ、拳銃のように二発の赤い魔力弾を放った。小さいながらもスピードと貫通力に重点をおいた強力なものだ。狙いは頭と胸にそれぞれ一発ずつ。最も殺傷能力の高い撃ち方だとも言われている。

それに対して優麻がとった行動は、実に単純なことだった。

「フッ」

『右手』でまず頭に向かってきた魔力弾をはたき、返す手で胸を狙う弾を撃ち落とす。往復ビンタとも言えるその動作は一見すると簡単だが、由姫の初手を完全に読み切ったからこそできることだ。しかし、それは彼女とて同じこと。魔力弾を放つと同時に、彼女自身も駆けだしていた。

「M a c h t : : S p e e d : : !」

『力』と『速さ』をつかさどるフレーズを短く刻み、三步で優麻の懐に潜り込む。

「ハッ！」

全身を捻りながら打ちだす、魔術によって強化した拳によるアッパークット。通常の間人相手なら、それこそ骨をも粉々に砕く一撃だ。

ガキンと、何かが壊れる音がした。

優麻は、身体の前で『右腕』、右脚を折りたたむことでそれを防いだのだ。受けた右手で、そのままバックハンドからの攻撃を繰り

出す。

「ック！」

先程と同じ破裂音が響く。由姫はとっさに左腕を引き、脇からの襲撃から身を守った。

それから数合、あらかじめ打ち合わせでもしていたかのように、タイミングが同期された打撃の応酬が行われた。

優麻が右なら由姫は左。由姫がハイキックで横面を狙えば、優麻は右腕で迎撃。

そしてどちらともなく距離をとり、間合いを測る。

「思っていたより厄介ですね…その右手、『幻葬』というのは」

肩で息をしながら、由姫は呟いた。

バレたか

やはりというか流石というか。由姫は僕が彼女の攻撃を全て『右手』で受けていることに気付いた。そしてこれこそが、僕が手に入れた能力。

沙耶を失い、それまで歩んだ魔術の秘跡全てを犠牲にして掴んだ、唯一無二の力。

ファンタム
『幻葬』

魔術だろうが神の神秘だろうが、『異常』と判断されるもの全て

を無効にする最強のカウンター。

術式を組み立てても片っ端から打ち消してしまつたため自身は魔術を使えないが、対魔術師戦において圧倒的な優位に立てる僕の切り札　なのだが…

敵にすると、思つてたより厄介だな。由姫のヤツ

由姫は普通の『魔術師』ではない。彼女の本分は肉体を武器とした近接格闘戦。通常の戦闘において、彼女にとって魔術はあくまで『補助』でしかない。

これまでは由姫が彼女自身にかけた『強化』の術式を消しつつ迎撃していたのだが、

右腕が

正直、腕にかかる負担が半端じゃない。強化術式を消せても打撃による攻撃そのものは消せないのだから。

これから受ければ受けるほど、持久戦になるほどこちらが不利になるだろう。僕もなんとかして反撃しなければならない。

さて、と

心を落ち着け、イメージする。

右手にある『幻葬』の力の範囲を、少しずつ伸ばしていく。にじみ出た実体を持たない『ソレ』は、徐々に集まり、互いが互いを編みこみ、その存在を確かなものへと変えていく。

想像するんだ…武器を

貫く骨子は己の意志。切り裂く刃は己の力。

水飴のような状態から、やがてはつきりとした形を伴って僕の右手に握られたのは

「できた」

一振りの、剣の形をした幻。

今度はこっちから！

『幻葬』の剣を手にも、行く。

僕が放つ横薙ぎの一閃に対し、由姫は両腕をクロスさせて防御。しかし、幻の刃がその守りを打ち砕く。

術式を破られた反動で体制を崩す由姫の顔が、驚愕の色に染まった。何しろ僕は右手で直接彼女に接触していない。にもかかわらず自身にかけた強化の術式が破られたのだ。

僕は間髪入れずに、袈裟斬りの一撃を叩きこんだ。

あの斬撃

優麻からの『見えない』剣撃を受け、由姫は後方に跳んだ。

『幻葬』の効果は、発動媒体である右手を相手に接触させなければ発動できない。では、なぜ接触前から打ち消しが働いたのか。

優麻は有効範囲を通常時の右手から無理やり延長させることでそれを可能にしたのだろう、と由姫は当たりをつけた。

「そんな使い方もできるなんてッ！」

「僕も今気付いたんだけど、ねッ！」

二人は再び、同時に動いた。

無理やり伸ばしているなら、その安定度は通常時よりも低いはず…

優麻の上段からの振り下ろしを避けながら、由姫は考える。

それなら、力押しで突破することは、可能！

たとえ術式が消されても、消されても、その度に重ねがけしても一度打ち込めばいい。たとえ範囲が伸びていても、強度で劣るならいずれは碎けるはずだ。耐久勝負なら、こちらに分がある。

「！」

行った。

右、左のストレート。そのまま両腕を引き絞り、反動で全身を前に押し出すようにして膝蹴りを見舞う。さらに当てた脚を伸ばしてのトゥーキックに繋げ、とどめとばかりにかかと落としを喰らわせた。その狙いは全て『剣がある』と予想される空間。拳が、脚がぶち当たる度に強化術式が解除されるが、その度にさらなる強化と速度の術式を刻み、次の攻撃に繋げていく。殴れば殴るほど、彼女の打撃は強さと鋭さを増していき、対照的に優麻の顔は苦痛に歪み、対処する動きにもキレがなくなる。

そして遂に

「そこっ！」

優麻が振るった剣に拳をぶち当てたとき、何かが崩れる確かな手

ごたえを由姫は感じた。目の前の優麻の目が、カツと見開かれる。その隙を、由姫は逃さない。即座に打ちだした腕を折り曲げ、肘打ちを繰り出した。狙いは、優麻の左半身

「え!？」

これで終わらせるつもりだった。しかし、必殺の一撃となるはずの彼女の右肘は、

優麻の『左手から伸びた何か』に、しっかりと受け止められていた。

左手に創り出した幻想剣で由姫の一撃を受け止め、さらに再び展開した右の剣で追い打ちをかけて、間合いを開ける。

とっさに僕がしたのは右手に溜まっている『幻葬』の力を、身体というパイプを通して左腕に流し込み、発現させるということだった。

幻想剣を創り出したときに解ったことは、二つ。まず、力はある程度の流動性をもっていること。そして本来あるべき場所である右手から離れるほど、効果の安定性は低下すること。

事実、左手に握られている幻想剣は右手にあるそれよりも『幻らしく』見える。透き通っているが輪郭がはつきりとしている右の剣に比べ、霧が集まって辛うじて形を保っているかのような存在感。あと一、二回攻撃を受ければ間違いなく碎けるだろう。

度重なる僕の予想外の反撃に警戒しているのか、由姫もすぐには仕掛けてこない。

しばしの間の、小休止。

「範囲拡張、全身で固定」

その間に力の蛇口を開き、身体中にそれを行き渡らせる。薄皮のバリアにすっぽりと包まれた感覚。これで由姫の攻撃を直に受けても耐えきれはらずだ。

双の幻想剣も一度解除。もう一度、強度も新たに練り直す。準備は、整った。

「 優麻先輩」

黒曜石のような由姫の瞳が、真っ直ぐに僕を射抜く。これ以上にないくらい真剣で、一切の妥協を許さない、真面目な彼女らしい瞳。

『優麻先輩、この課題なんです』

『先輩！仕事なんだからサボらないで、真面目にやって下さいよ！』

『やった！見て下さい先輩、できましたよ！！』

『先輩 』

「 貴方を、砕きます」

思い出の中の彼女も、今と同じ、真っ直ぐな瞳をしていた。

由姫が突っ込んでくる。僕も、前に出ることですそれに応えた。

大地を蹴り、風を裂き。もっと、もっと前に行く。

拳と刃が交わる。

僕も、たぶん由姫も、解っていた

互いの体が交差し、即座に反転。

これで、本当に、決着がつく。そう、ここが

再び、激突する。

僕らの、終着点。

流転する幻想（後書き）

と、いう訳で二話でした。夢追人です。

今回、というかこのお話全体を見てもバトルシーンが大きな割合を占めています。リハビリがてらなのに戦闘ばかりは正直きつい…少し長くなったかもしれませんが、いかがでしたでしょうか？

一応、予定では次回がクライマックス。完成図としては、原作の始まりにつなげられるように持つてくつもりです。読み手によって評価が分かれる終わりになるかと…

次回もよろしく願います。夢追人でした。

最後の幻想

二人の戦い方はそっくりだった。それもそのはず、優麻が由姫に戦いを教え、由姫は優麻からその全てを学んだのだから。今の二人は、先輩と後輩、教師と教え子の域を出た、一人の戦士の片割れだった。

戦いの中でしか交わることなく、完成することのない、一つの歪な生命のカタチ。

幻の刃が煌めく。跳躍すれば避けられる。くるぶしを狙えばかわされ、拳は受け止められた。

永遠に続くかと思われたそれにも、終わりは唐突に訪れた。

一瞬だった。

由姫の拳の弾幕と、嵐のような脚撃の前に、ついに優麻の左の幻想剣が碎けた。優麻が新たに剣を錬成する前に、由姫は己の持てる速度の全てをもって、最後の攻撃を叩きこんだ。

右脚で蹴りを入れ、重心を低くし、さらに右の肘打ちに繋げる。打ちだした力を利用して身体を回転させ、さらに左の肘打ちをぶち込む。連続して負荷がかかった幻葬の守りも破られ、まず、優麻の左腕がその役目を終えた。

由姫の攻撃は続いた。腰のひねりを加えることで反転の力を衰えさせることなく、連続してもう一度右脚による蹴りを繰り出し、続けてバック宙でもするように両の脚で蹴りあげる。下から突き上げられた優麻の身体が、宙を舞った。

それを追って、由姫も跳躍。一息で優麻より高い地点まで跳び、地面に向けて蹴り落とす。

これで

地に叩きつけられる優麻。衝撃で肺から空気が絞り出され、その口が酸素を求めて喘ぐ。既にその身に幻葬の加護はなく、彼は全ての攻撃を生身の身体で受けていた。筋肉は裂かれ、骨は砕かれ、内臓も無事か解らない。それでも、その眼はしかと、由姫の姿を見つめていた。弟子が自分を越えた事の嬉しさと、最後まで目的を果たせなかった悔しさを湛えて。

「終わりです！」

穿つ。

上空から、由姫は優麻に覆いかぶさるように着地し、己の拳を

『魔術師殺し』をその身に打ち込んだ。

『魔術師殺し（エクスキューション）』とは由姫の持つ固有術式だ。かつて彼女の持っていた高い魔力の伝播、発散能力に目を付けた優麻が編み出した、その名の通り対魔術師戦における切り札である。

魔術師の持つ魔力というものは通常、生体エネルギーとして専用の経路を通り術者の体内を循環している。術式を使用する際、魔力はそれぞれの術式に対応したプログラムによって複雑に編み込まれ、結果としての現象を生み出すのである。

そこで術者の魔力のみによって形作られている術式に外部から構成要素として別の魔力を無理やり組み込むとどうなるか。互いの魔力が反発しあい、そこから歪みが生じ、崩壊してしまうのだ。

由姫はこれを術式ではなく、魔力経路に対してやってのけた。相手の魔力経路に自身の魔力を強制的に送り込み、異物の侵入を察知

した相手の魔力はこれを排除しようと活性化する。この反発現象が魔力経路を伝播し、やがて経路全体が暴走。対象の肉体をその内側から破壊する。発動の直後に相手の身体が吹き飛んだなど、さらに起きた話だった。術者の身体を破壊するのは術者自身の魔力であり、由姫はただ、そのきつかけとなる少量の魔力を撃ち込み、広げてやるだけだ。

しかしこれは、あくまで『普通の』魔術師が相手の場合。

優麻の全身には、打ち破られたとはいえ、『幻葬』による打ち消しの力が残っている。加えて彼が戦闘中に魔術を使わず、必要以上に魔力経路に負荷を掛けなかったのが幸いし、最大の効果を得ることはできなかった。

それでも、優麻の身体をズタズタにし、戦闘不能に追い込むことは充分に可能だった。

気を失う前、僕が最後に感じたのは、全身を駆け巡った猛烈な圧力と激痛だった。絶叫より先に血反吐が迸り、全身の筋肉は痙攣し、神経は引き裂かれ、身体がバラバラになるかと思った。こうして生きていたのも、全身に纏い、今なお右手でその力を生み出し続けている『幻葬』の恩恵だろう。痛みが消え、大分楽になった。いや、消えたのは痛みだけじゃない。

倒れた地面の冷たさも、膝枕をしてくれている由姫の温かさも、優しく髪を梳いてくれる彼女の手の感触も感じない

僕はもう、何も感じてはいなかった。

「…沙…耶…」

何も感じない、ガランドウの心に、まるで命の灯のように一つの思いが湧きあがった。ここで倒れてはダメだ、という曖昧ながらも

強い感情が僕を支配する。

何故？どうして？何のために？

「沙、耶…」

そうだ、沙耶だ。ここで倒れたら、全てが無駄になる。また、彼女を失ってしまう。魔術を捨て、居場所を捨て、友人を捨て、全てを捨てて掴んだ『幻葬』の力。これからだっていうのに。これから、やっと始まると思ったのに…！

「…沙耶…！」

いやだいやだいやだ！まだだ、まだ終わらない！終わりたくない！！

あの時護れなかった自分が許せない。間に合わなかった自分が情けない。もう、あんな思いはしたくない。

ここで、この場所で二度も、沙耶を失いたくはない！

必死になって、右腕を伸ばそうと躍起になる。しかし、焦りと恐怖に駆られた僕に対して、身体はピクリとも動かない。まるで、僕の手足ではないかのように。

「…先輩」

右頬に、ポタポタと水滴が落ちてきた。感じることはできなくても、それが由姫の涙であると、記憶が伝えてくれる。

「由、姫…」

泣いてるのか？

もう、声になっているかも解らない、かすれた息が僕の口から出

た。

「もう、十分ですから……」

動かぬ身体を引き寄せられ、抱きしめられる。

「もう、大丈夫ですから……！」

由姫は、泣いていた。泣きながらも、僕の身体を抱いていた。強く。強く。何かを刻みつかるときのよう。

敬愛。親愛。そして 恋慕。

想いを、刻みつけるかのよう。

「だから……」

その時、僕は由姫が次に紡ぐこととしている言葉を直感的に理解した。胸に宿った灯が、風を受けたように揺らぐ。ダメだ。言わないでくれ。それを言われたら、認めてしまったら、僕は

もう、沙耶はいない。帰ってこない。時の流れは不可逆だから。

僕はそれを理解していることを知っていた。理解してなお、知っていてなお、そこから目を背けたことも解っていた。

本当は沙耶のためなんかじゃない。そうしなければ、失ってもなお『沙耶』に頼らなければ、僕は生きられなかったからだ。

大切な人を護れなかった自分で自分が許せなかった。そして僕には、失くした心の虚を埋めるための手段もなかった。ぽっかりと穿たれた、沙耶の形をした虚。

だからそれにすがりつき続けた。一人で沙耶を救う気になって、

勝手に全てを放り捨てて、誰にも望まれない復讐を語った。彼女は
何よりも、自分のせいで誰かが傷つくのを嫌った優しい女性である
ことも忘れて。

何故？どうして？何のために？

誰のために？

沙耶のためにと口ずさみながらも、僕が彼女にしてあげたこと
は何もない。ただ、自分に都合のいいストーリーをでっちあげて、
そこに逃げ込んでいただけ。

ああ、なんて

なんて空虚で哀れな、カラッポの幻想。

「『誰か』のためじゃなくて、『沙耶先輩』のためじゃなくて、
『自分』のために生きて下さい！！」

そうだ。僕が欲しかったのは、力でも何でもない。

「僕は、許されたのか…」

ただ、誰かに許して欲しかったんだ。

「…はい」

「もう、いいのかな…」

「もういいよ」って、言っただけだったんだ。

「…はいッ！」

何よりも、その言葉の温もりが。

「由姫」

彼女の耳元で囁いた。今から、最後に何かができるなら。『自分の意志で』、この虚な穴を埋めることができるなら。

「頼みたいことが、あるんだ」

どこまでも、白が続く空間だった。

どうやって来たかは解らない。遊びに行こうと家を出たら、いつの間にかここにいたんだ。

知らないところだけど、不思議と怖いとか帰りたいとは思わなかった。だって、俺がよく知っているヤツと同じ、安心できる空気がそこには満ちていたから。

「やあ、また会ったね。当麻くん」

やっぱり、いた。

いつの間にか俺の前に立っていたアイツ 優麻は微笑んだ。

「当麻くん、僕ね、これから遠くに行かなきゃならなくなったんだ」

唐突に、優麻が口を開いた。

「へ？昨日帰ってきたばっかじゃないかよ。もう出ていくのか？」

「うん。急に用事が入ってね」

優麻はいつもそうだった。一緒に遊ぶ約束をしても、すぐにどこかへ行ってしまう。毎回毎回、果たされない約束だけが残されてきた。

「次はいつ戻ってこれるか解らないからね。当麻くんにはちゃんとお別れを言っておこうと思って」

屈んで俺と視線が同じ高さになった優麻の右手が、俺の頭に乗せられた。そのままゆっくりと頭をなでられる。

「僕にはどうしても護りたかった大切なものがあっただけだね、護れなかった。僕は本当にどうしようもないヤツなんだと、死ぬほど後悔したよ」

頭をなでる手は暖かくて、優しくかった。

「いつか君も、そんな存在を得ることになると思う。そしたら絶対に手放さないようにして欲しいんだ。これから君が生きる長い時間の中で、楽しいことや嬉しいことより、辛いことや悲しいことの方がはるかに多いと思う。それでも、何があっても、大切なものだけは護り通して欲しいんだ」

優麻は立ちあがった。そのため、自然と右手も頭から離れる。

「約束、できるかい？」

そう言って優麻は右手を差し出してきた。約束してくれ、と言うように。

正直、俺にはよく解らなかった。優麻が何を言いたかったのか。

「ああ。解った」

でも何かが、俺にそう答えさせた。懺悔するように、祈るように言葉を紡いだ優麻が、なんだかすぐに消えてしまいそうなくらい儚かったからかもしれない。

「絶対に護ってみせるよ。俺の分だけじゃなく、優麻が護れなかった分もさ」

幼いなりの正義感や責任感、解らないけど『答えなきゃ』っていう強い気持ち。そんな曖昧な気持ちがちや混ぜになって、一気に流れ込んで来たからかもしれない。

「だから安心しろって。な？」

それでも、俺は自分の言葉で答えて、優麻の手を握った。

「うん。ありがとう」

優麻が、笑った。悲しみも、苦しみも、全てを取っ払った、どこまでも澄み渡った青空のようにキレイな笑顔だった。

優麻が右手を握り返してくる。強く、強く、そこに何かを残そうとするように。

それが自分の生きた証だと言うように

「それじゃ、お別れだ」

こちらに背を向け、優麻は歩き出す。遙か地平の彼方、白い光の

向こう側へと。

「優麻！」

堪らずに、俺は走り出していた。このまま突っ立っていたら、二度と優麻に会えないような気がしたから。優麻との距離はどんどん開いていく。追いつがっても追いつけない。俺が走れば走るほど、白い光は強くなる。それだけ優麻は遠くに行ってしまうようにさえ感じた。

「ごめんね、当麻くん」

一瞬、優麻が振り向いた。それはいつも、アイツが勝手に家を出ていくときと同じ言葉。ただ、終わりの方が少し変わっていた。

「これで、最後だから」

走った。

「花火大会に行こうって約束しただろ！さっきだって次に会うまでの約束しただろ！他にもたくさん約束があるだろ！なのに『最後』ってなんだよ。全部ほったらかして逃げるのかよ！！」

走り続けた。

「行くなよ！優麻！」

もう、優麻は振り向かなかった。

「優麻！！！」

懸命に伸ばした手は、ついに届くことはなかった。

茜色に染まる空の下、目覚めたとき、僕の頭は再び由姫の膝の上に戻っていた。

僕が由姫に頼んだことは、僕の意識と当麻くんの意識を一時的に繋げてもらうことだった。

「『幻葬』の力を、渡したんですね？」

由姫の問いかけに、うん、とだけ答えた。僕の右手に、もう『幻葬』はない。新たな約束と一緒に、彼に託してきたのだから。

「これで僕には力も何もない。ただの『上条優麻』だ」

それでも、最後に彼に会えてよかった。彼なら、きっと護ってくれる。僕に護れなかったものも、きっと護り通してくれる。

そう、約束したんだから。

「けどなんでだろう。全部終わって、すごく気持ちがいいんだ」

由姫が髪を梳いてくれる。もうずっと昔に、母さんがそうしてくれたみたいにゆっくりと、優しく。

『絶対に護ってみせるよ。俺の分だけじゃなく、優麻が護れなかった分もさ』

「ごめん。安心したら、少し眠たくなってきた」

温かい。それに身体がふわりと浮きあがりそうになるくらい、軽く感じる。

瞼が下がりがけるのを何とか耐えて見上げると、由姫は微笑んだ。その双眸に湛えた涙を隠そうとするように。

ああ、ホントに、由姫には迷惑を掛けてばかりだ

「…ねえ、由姫」

「何ですか？先輩」

だから、僕が僕でいられる間に、これだけは言っておきたかった。

「ごめん。そして」

ありがとう

紅が差した彼女の頬を、一滴のしずくが流れ落ちた。一度決壊してしまったそれは、最早留まることはなく

『だから安心しろって。な？』

「おやすみ、由姫…」

適当な時間に起してくれると嬉しいな、なんて思いながら。

失ったあの日の、幸せな夢が見れることを祈って。

僕は瞼を閉じた。

最後のその時まで、僕は笑顔でいることができた

最後の幻想（後書き）

こんにちは、夢追人です。とりあえず、優麻のお話は終わりました。いかがでしたでしょうか？後は短い後日談をくつつければ本当の意味で完結します。

あんまり後書きで書くことはないのですが、強いて言えば…

当麻くん、小学生のはずなのに考えがしっかりしすぎ。こんな子だからあのスーパー説教タイム（SST）を素でやれるんでしょうね…

忘レモノ

学園都市。

東京都の三分の一の広さを誇り、その名の通り学校やら大学やら研究所やらのあらゆる教育・研究機関の集合体であり、必要な生産・商業施設などの各種インフラを始め行政・立法・司法の三権さえも独自に運営する自己完結した『都市』である。最先端科学の要塞のような場所であり、都市の内外では

技術レベルに数十年の差があるとさえ言われている。

総人口は二百三十万人であり、その八割が学生だ。

その学園都市のとある学生寮の一室で、彼　上条当麻は目を覚ました。

いつもなら『不幸にも』鳴らないはずの目覚まし時計のアラーム音が、今日に限ってけたたましく鳴り響いたのである。それでも針が指しているのは予定より大分遅れた時刻であったが。

にもかかわらず、そんなものは今の当麻にとってどうでもいいことだった。

「　夢、か」

夢を、見ていた。霞がかかったように内容がよく思い出せない、夢特有の感覚に苛まれながらも、当麻は一時の幻想を回顧する。

「　なんか、温かったな…」

温かい夢。懐かしい夢。ずっと昔の、彼にとって何か大切な、そんな夢。

上体を起こし、未だに喚いているアラームを殴りつけるように黙らせる。ベッドから跳び出して手早く着替えを済ませながら、視線

の隅でちらりと日付を確認した。

七月十九日。

その数字が意味するのは

明日っから、夏休みだーっ！

今日一日を乗り越えれば、明日からは待ちに待った学生たちの天^{ディン}国、夏休みの始まりだ。それだけで当麻のテンションは一気にゼロからMAXへと駆け上がる。遅刻の危険などどこ吹く風だ。

そんな調子で転がっていた学生鞆をひつつかんだとき、その『右手』がどくと疼いた。

「ッ
」！
」

その存在を改めて告げるような強い脈動。思わず鞆を取り落とし、当麻は己の右手をじっと見つめる。

グーパーグーパーを繰り返し、最後にひらひらと振ってみた。

「何でも、ないよな？」

夢。七月十九日。疼いた『右手』。

何かが起こる。予感めいた強い確信。

「右手が疼くって…あれですか？上条さんはどこの中二病ですか？」
「？」

気を取り直して鞆を拾い上げ、ちらりと時計を確認すると

「やばっ！遅刻
」

最早本能としか言えないようなスピードで玄関にダッシュ。両足をスニーカーに突っ込み、ドアを開け、一步を踏み出そうと

「あ……」

左のスニーカーの紐が切れていた。さらに前に出した右足がドアのでっぱりにつかかってキレイに態勢を崩し

「不幸だーっ！」

当麻の叫び声と、少し遅れて転倒する派手な音が辺り一帯に響き渡った。

七月十九日。夜。 21:00。

「久しぶりの日本だな」

学園都市のとあるビルの屋上に、僕たちはいた。頭上には夏にも関わらずよく澄んだ夜空が広がっている。青白く、冷たい月光が、僕らを照らしていた。

この神秘的な光が、僕は好きだったような気がする。

「上もまた、難しい仕事ばかりを回してきますね」

彼女 狩野由姫が僕の隣に寄り添うように立つ。眼下を見つめる彼女にならって、僕も街灯と喧騒に満ちた下界を見下ろした。

「問題ないさ。僕と君なら」

凜々しく表情を引き締めた由姫に、僕は軽く声を掛ける。由姫は真面目なあまり、根詰めすぎてそれが空回りしてしまうことがよくあった。

由姫はもう少しリラックスすることを勉強するべきだな。

まあ、それも彼女のかわいい点と考えれば、それはそれでいいのだが。

「そうですね。私と貴方なら」

フツと由姫は頬を緩める。よし、これでようやくいつも通りだ。そう。僕と由姫はずっと一緒だった。これまでも、そして、これからも。彼女がいない人生なんて想像もつかない。

僕は狩野優麻。

任務内容は行方不明となった十万三千冊の魔道書、『禁書目録』の確保。

「それじゃ行こうか、由姫」

「ええ、優麻」

一つの終わりは、新しい始まり。
受け継がれた物語は、これからも続いてゆく。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

i
n

”
I
n
d
e
x
”

忘レモノ（後書き）

こんにちは、夢追人です。長かったようで短かった優麻さんのお話も完結です。気が向いたら簡単な設定集みたいなものを載せようかということ（誰得？俺得！）表示は連載扱いにしておきますが、お話自体は今回で完結です。

まだまだ至らない文章ですが、最後まで読んで頂いた方、本当にありがとうございます。御意見、感想等ありましたら、いつでもお待ちしております。

願わくば皆さんの記憶の中に、少しでも長く優麻たちが残ってくれることを祈って

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251p/>

幻葬のファントム

2011年10月7日05時34分発行